

## 家 庭 科

### 生活の中で自分の力を発揮する子どもの育成 ～身近な生活を見つめ、自分の力を高めることができる授業の展開～

実践的・体験的な活動を通して身に付けた力を試せるようになることが、子どもたちが家庭科における学びの楽しさを感じることであったと考えました。

学習課題を解決するための「比較する活動」に取り組み、身の回りの物や方法の違いやよさを実感を持って理解することができれば子どもたちは身近な生活に対してより関心を持ち、学んだことを生活の中で生かそうとするのではないかと考え、研究に取り組みました。

(家庭科主任 高田 明美)



#### 1 研究の経緯

全体提案「学びを楽しむ子どもを育てる」を受け、本校家庭科では、家庭科の「学びの楽しさ」を次のようにとらえた。

生活にかかわることがらについて、実践的・体験的な活動を通して実感を持って理解すること。  
そして、その学んだことを生活の中で活用すること。

その上で、昨年度は研究副主題を「実践的・体験的な活動を通して、できる自分に出会う授業の構想」として研究に取り組んだ。それにより、子どもたちは明確な目標を持って基礎的・基本的な知識及び技能を習得した上で、身に付けた力を生かす活動に取り組み、「できる自分」を感じることができた。一方、課題としては、子どもたちが身の回りの生活により関心を高めていけるようにすることや授業における伝え合い活動のさらなる充実を図っていくことが挙げられた。

これらの成果と課題を踏まえて今年度の研究を進めていくことにした。

#### 2 全体提案との関連

昨年度の研究では、子どもたちが家庭科の学びの楽しさを感じられる題材展開の工夫をしてきた。今年度は、その内容を生かした上で、後述する「比較する活動」を、子どもたちの学びを確かな力とする山場として設定したり、家庭科の学びの楽しさを活動や場面ごとに適切に支援したりしていくことで、家庭科の学びの楽しさをさらに味わせるストーリーを生み出していきたいと考えた。

伝え合い活動については、昨年度「気付きを共有する伝え合い」を重視してきた。今年度は、それに加え実践的・体験的な活動を行う前の段階にも、自分の生活体験や既習の知識を生かし、方法や結果について話し合う「予想する伝え合い」の場を設けていくことにした。それによって、自分の生活を見つめ直したり、考えを明確にしたりした上で、活動に臨むことができるようにしてきた。

題材の終末においては、これらの学習活動を通して力を高めてきた子どもたちが、身に付けた知識や技能について整理し、自分の力の伸びを実感できるような学習活動を工夫してきた。

#### 3 研究の方向

近い将来、生活の中で一人一人が自分の力を発揮することができるようにしていきたい。そこで、昨年度の成果と課題、今年度の全体提案の内容をふまえ、今年度の研究では、子どもたち自身が身近な生活に対して、より関心を持ち、自ら課題の解決に取り組んでいく態度を育てていきたいと考えた。それによって、衣食住にかかわることがらに対する知識や技能が今まで以上に高まっていけば、学校で学んだことを日常の生活の中でも活用していこうとする意欲に繋がると考えた。

以上のことから、今年度の研究副主題を次のように設定した。

＜研究副主題＞ 身近な生活を見つめ、自分の力を高めることができる授業の展開

この副主題に迫ることで、生活の中で自分の力を発揮する子どもの育成を目指していくことにした。

#### 4 研究の内容

上記の研究副主題に迫るため、主に次の2つの内容について研究をしてきた。これらは、比較する活動を軸に家庭科の学びの楽しさを味わうストーリー性のある展開を支えるものであり、子どもたちの家庭科に関する知識及び技能を高めていくためのものであると考えた。

- (1) 身の回りの物や方法に関心を持ち、課題を解決していく題材展開と教師の支援
- (2) 予想する伝え合いと気づきを共有する伝え合い

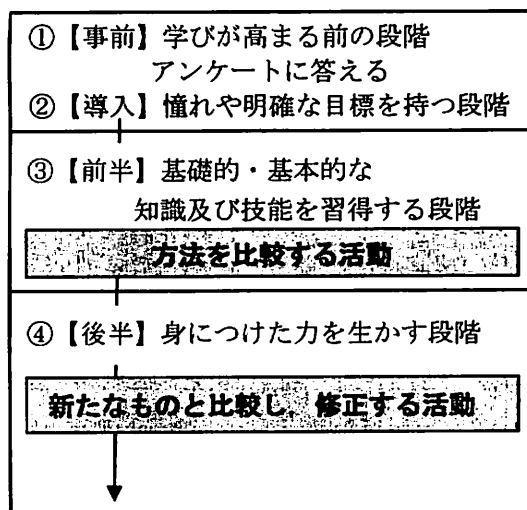
(1) 身の回りの物や方法に関心を持ち、課題を解決していく題材展開と教師の支援

ア 子どもが意欲的に取り組む比較する活動を取り入れた題材展開

昨年度は、子どもたちが家庭科における学びの楽しさを感じられるようにするために、次のように題材展開を工夫してきた。(図-1) まず、題材ごとに身に付けるべき知識及び技能を精選し、導入で明確な目標を持てるような学習活動を工夫した。次に、展開前半において基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けられる課題に取り組んでいけるようにした。そして、後半では身に付けた力を使って、子どもが自分の力でできることの広がりを感じられる活動を取り入れていった。

これら一連の展開を本校家庭科における楽しさを味わうストーリー性のある展開モデル(附小家庭科モデル)として位置付け、以下に示す今年度の新たな視点である「比較する活動」を加えていくことで、学びの楽しさを味わうことができるようにしてきた。

図-1 【家庭科の学びの楽しさを味わう  
ストーリー性のある展開モデル】



各題材には、子どもたちに身に付けさせたい複数の知識及び技能がある。家庭科では、それらについて実践的・体験的な活動を通して、実感を伴った理解をさせることが求められる。なかでも、実践的・体験的な活動の一つとして本校家庭科が注目したのが、複数の身の回りにある物や方法を「比較する」活動であった。家庭科における比較することの教育的な効果として、次の3つの効果があると考えた。1つは、比較することで、身近にある物や方法に目を向け、特徴や違いについて考えたり、気付いたりすることができる。2つ目は、自分自身の価値判断が問われることで、生活を見つめ直したり相手の意見を取り入れたりしようとする態度が高まる。3つ目は、比べたり選んだりすることの楽しさが学習活動を活性化させ学習意欲を高める。ということである。

これらのことから、各題材の実践的・体験的な活動を分類・整理した上で、効果的な場面において比較する活動を取り入れてきた。具体的な比較する活動の取り入れ方については、題材によって様々な段階や方法がある。題材の前半で比較する活動を取り入れることによって、子どもは「どちらが適切な方法なのか？」と問題意識を持って新しい学習に取り組むことができると考えた。題材の半ばや後半であれば、前半で学んだ方法と新たな方法の違いについて考えることもできると考えた。

これによって、身の回りの生活に目を向け、自分の生活経験や学習を通して得た知識や技能を持ち寄って課題を解決したり、目的に合った方法を選んで製作活動に取り組んだりすることができれば、子どもたちは、より達成感や満足感を得ることができると考えた。

図-2 【比較する活動の主な例】

<p>【それぞれの教材の特徴を知るための比較】</p> <div> <div>キャベツ</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・キャベツは薄く、葉物である。</li> <li>・キャベツには芯がある。</li> </ul> </div> <div> <div>ジャガイモ</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ジャガイモは硬く、根菜である。</li> <li>・ジャガイモには芽がある。</li> </ul> </div>	<p>【適切な方法を考えるための比較】</p> <div> <div>なみ縫い</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・なみ縫いよりも半返し縫いや本返し縫いの方の縫い目が細かい。</li> </ul> </div> <div> <div>本返し縫い</div> <div>半返し縫い</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ほつれやすい所は本返し縫いで縫ってみよう。</li> </ul> </div>
<p>【活動前と活動後の変化の比較】</p> <div> <div>洗濯前の靴下</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・つま先やかかとがひどく汚れていてきたない。</li> <li>・しっかりとみみ洗いをしたのきれいになり気持ちがいい。</li> </ul> </div> <div> <div>洗濯後の靴下</div> </div>	<p>【既習の知識・技能との比較】</p> <div> <div>5年 ゆでる調理</div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ゆでるよりも炒める方が短時間でできる。</li> <li>・炒める調理は味付けが楽しめる。</li> </ul> </div> <div> <div>6年 炒める調理</div> </div>

実践例 6年生 <健康アップ大作戦！ ～ 1食分の食事を考えよう ～>



自分が食べたい1食分の食事メニューを考えた上で、学校で食べている給食のメニューと比較する活動を取り入れた。それにより子どもたちは、「わたしが考えたメニューにはビタミンがない。」「ぼくのメニューは給食に比べて脂質が多い。」といったことに気付くことができた。その後、子どもたちはサンプルメニューや友達との伝え合い活動をもとに栄養のバランスが整ったメニューを考えることができた。

イ 実感を持って理解することをより楽しむことができるための支援

本校家庭科では、家庭科の学びの楽しさを味わっている子どもの姿を、本質的な楽しさのとらえから、次の姿として設定した。

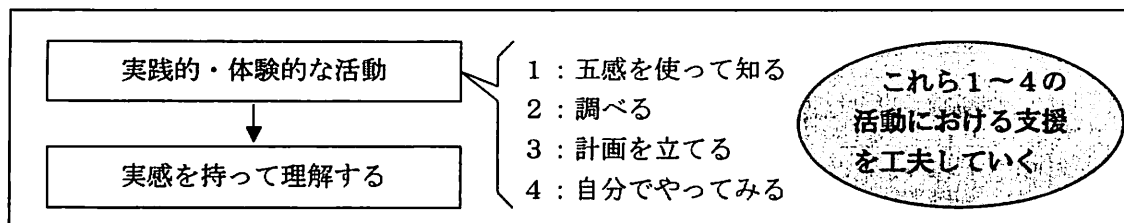
生活にかかわることがらについて

実践的・体験的な活動を通して、実感を持って理解し、  
学んだことを生活の中で活用する姿

今年度は、昨年度の楽しさを感じるための研究を受け、第2年次として授業中の姿に焦点を当てていくことにした。それによって、子どもたちが実感を持って理解することの楽しさを味わうことができるようにしていきたいと考えた。

そこで、本校の家庭科における全ての実践的・体験的な活動を内容ごとに分類し、それらを成立させている主な活動を「五感を使って知る」「調べる」「計画を立てる」「自分でやってみる」の4つに整理してみた。これら4つの活動における支援を充実させていくことにより、子どもたちが実感を持って理解することができると考えた。

図-3【実践的・体験的な活動を構成している4つの活動】



45分間の授業においては、1～4それぞれの活動における支援の仕方を、より具体的に工夫していく必要がある。そのため、子どもたちが楽しさを味わうための主な支援を、授業の「事前の支援」と「事中の支援」の2つの側面から考え、場面ごとに授業に生かしていくことにした。

以下に示すのは、5年生の「みそ汁づくり」の学習における支援の実践例である。

例 <5年 日本の味～ごはんのみそ汁～> にぼしのだしを味わってみよう	
【本時の主な活動】五感を使って知る	
< 事前 >	
物	・ にぼし ・ 味噌 ・ 調理器具一式
活動	・ にぼしのだしを味わったり、味噌を加えて比べてみたりする。
場	・ 教師の演示を観察する場 ・ 調理する場
五 感 を 使 っ て 知 る	<p style="text-align: center;">&lt; 事中 &gt;</p> <p>【興味関心】→教師がにぼしからだしを取る演示をする場を設けることで、関心を持つことができるようにする。</p> <p>【知る】→だしの香りを嗅いだり飲んでみたりする機会を設けることで、にぼしのだしの特徴を知ることができるようにする。</p> <p>【比べる】→だしのみ、味噌のみ、だしと味噌の3つをを比較する活動を取り入れることで、だしと味噌について考えられるようにする。</p>

(2) 予想する伝え合いと気づきを共有する伝え合い

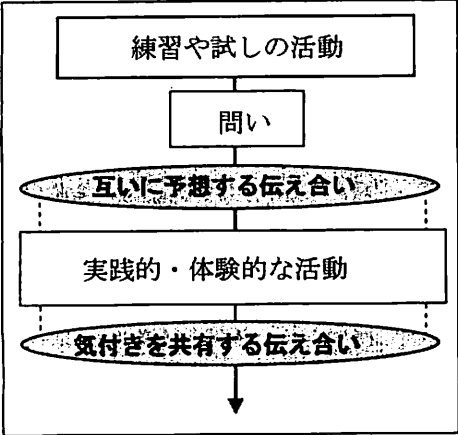
昨年度は、実践的・体験的な活動を通して一人一人が得た気づきを、話し合いやワークシートの紹介などの方法で共有する伝え合い活動を取り入れた。それによって、言葉や文字に表し、より確かな知識や技能の習得を図った。

今年度は、伝え合い活動をさらに充実させることを通して、正確な知識及び技能の習得や互いの気づきを共有することの大切さ、日頃の生活を振り返り課題について考えることの楽しさを実感できるようにした。具体的には、実践的・体験的な活動の前に「予想する伝え合い」を重視していくことにし、それによって、子どもたちは、家庭での様子を振り返ったり、これまでの学習をもとに方法や意味について考えたりした上で、互いの意見を交流し合うことができた。

例えば、気持ちのよい住まいに関する学習をする際、「どんな所をそうじする必要があるか。」という問いに対して、家庭の様子や学校での生活を振り返り、互いに伝え合う場を設定した。

探してみよう！ーより気持ちのよい場所にするためにー		
場 所	様 子	解決方法
かんきせん	ほこりがたまっている	ぞうきんでふく
ガスコンロ	油がついている	クレンザーでふく やぶきで拭く
はしこ	よごれがたまっている	ほうきでふく
窓	ちょっとしたよごれが	新聞紙でふく
机の下	小さいゴミが落ちている	ふいて取り除く する

図-4 【伝え合い活動の設定】



子どもたちは、それぞれに自分の生活を想起し、掃除の必要な場所について考え、その上で、実際に家庭の様子を調べてきたり、学校の各教室等を調べたりする活動を行うことができた。活動の後には、昨年度から引き続き、それぞれに気付いたことや思ったことを伝え合う場を設けることで、予想と同じだったり異なったりすることから、子どもたちは実感を持って理解することができた。教師が行う主な支援としては、「必然性のある伝え合い活動となるための問題の設定」「各自の考えを明確にする方法」「気づきや思いを共有することができるための言語指導」などを実践してきた。

これらの予想する伝え合いと気づきを共有する伝え合いによって、今までの身の回りの生活や家庭科での学びを見つめ直して考えたり、これからの生活に確かな力を生かしたりすることができるようにした。

5 研究の成果と課題

子どもたちが身近な生活に対してより関心を持てるようにするために、さらに多くの実践的・体験的な活動の時間を確保し、課題解決のための比較する活動を取り入れる題材展開の工夫をしてきた。比較する活動を行ったことで、調理や縫い方、環境を考えた快適な住まい方のよりよい方法に気づき、家庭生活の中で試してみたいという意欲的な姿が見られた。また授業における支援を事前と事中に分け、具体的に分類し活動ごとの場面に生かせるようにしたことで、調理や裁縫の実習において実感を持って得た知識や技能を、自分や家族のために実践しようとする子どもたちの姿が見られた。

伝え合う活動においては、実習における実践的・体験的な活動の前に「予想する伝え合い」を行うことで、子どもたちは家庭での様子を思い起こし、これまでの自分の経験や学習してきたことをもとにして考えを広げることができた。そして家庭での様子を詳しく調べてきたり、これからの活動に対する課題を明確にして取り組んだりすることができた。また活動の後に、気付いたことや思ったことを共有する伝え合いの場を設けたことにより、理解した知識や技能について整理してまとめ、自分の言葉で表現することができるようになった。このように自分の考えをまとめたり表現したりすることで、家庭科の学びを深めることができた。

今後の課題としては、比較して実感する上での観点をさらに明確にし、科学的な視点を取り入れながら表現できるようにしたい。例えば、AとBを比べてBの方が〇〇なので、Bは△△である。という論理的な表現ができるようにし、正しい知識に結びつけるための根拠をはっきりさせて理解を深めることができるようにしたい。また、他教科で得た知識を学習の中で意図的に話題にし、他教科との関連を図ることで、基礎的・基本的な知識や技能を確実に身に付けられるようにしたい。